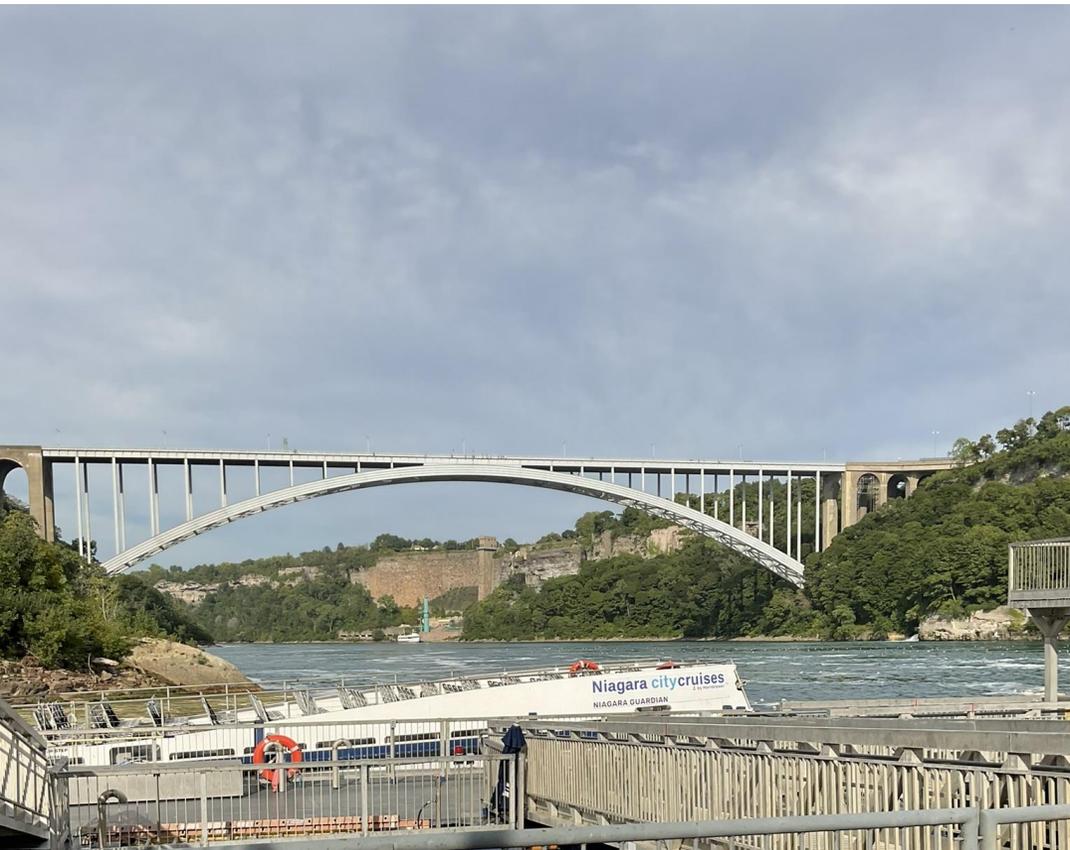


11章

境界条件(boundary condition)



辻

←カナダとアメリカの境界。

確認：変数と条件

$$\begin{cases} r, P, T, l, X_1, \dots, X_I : \text{変数} \\ m, t : \text{独立変数} \end{cases}$$

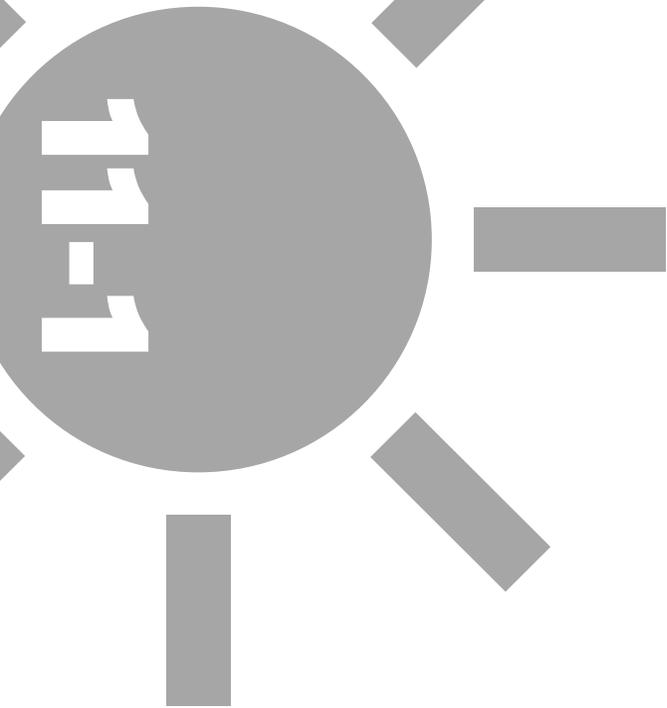
Complete equilibrium

静水圧平衡 + 熱平衡

基礎方程式のうち、時間微分を含むのは

$$\frac{\partial X_i}{\partial t} = \frac{m_i}{\rho} \left(\sum_j r_{ji} - \sum_k r_{ik} \right)$$

のみ。他は空間微分のみ。



中心条件

中心 : $m = 0$

このとき $r = l = 0$ [境界条件]

ただし P, T は外側からの積分で決まる。 P_c, T_c

中心付近での r, l, P, T の挙動を考えよう
(数値計算で発散しないように少しずつらす)



中心条件

連続の式

$$\frac{\partial r}{\partial m} = \frac{1}{4\pi r^2 \rho}$$

$$\rightarrow d(r^3) = \frac{3}{4\pi\rho} dm$$

$$\rightarrow r = \left(\frac{3}{4\pi\rho_c} \right)^{1/3} m^{1/3} \quad (\text{when } \rho = \rho_c)$$

エネルギー保存

$$\frac{\partial l}{\partial m} = \epsilon_n - \epsilon_\nu + \epsilon_g$$

$$\rightarrow l = (\epsilon_n - \epsilon_\nu + \epsilon_g)_c m$$

r, l の $m = 0$ まわりに
展開したときの1次式



中心条件

静水圧平衡

$$\begin{aligned}\frac{dP}{dm} &= -\frac{Gm}{4\pi r^4} \\ &= -\frac{G}{4\pi} \left(\frac{4\pi\rho_c}{3}\right)^{\frac{4}{3}} m^{-\frac{1}{3}} \\ \rightarrow P - P_c &= -\frac{3G}{8\pi} \left(\frac{4\pi\rho_c}{3}\right)^{\frac{4}{3}} m^{\frac{2}{3}}\end{aligned}$$

圧力勾配は中心でなくなる(c.f. $\frac{\partial P}{\partial r} = -\frac{Gm}{r^2} \rho$)

$$\frac{dP}{dr} \sim \frac{m}{r^2} \sim \frac{r^3}{r^2} \rightarrow 0$$



中心条件

エネルギー輸送①：輻射

$$\frac{dT}{dm} = -\frac{3}{64\pi^2 ac} \frac{\kappa l}{r^4 T^3}$$

$$\rightarrow T^4 - T_c^4 = -\frac{1}{2ac} \left(\frac{3}{4\pi}\right)^{\frac{2}{3}} \kappa_c (\epsilon_n - \epsilon_v + \epsilon_g)_c \rho_c^{\frac{4}{3}} m^{\frac{2}{3}}$$

$$(P \sim P_c, T \sim T_c, \kappa \sim \kappa_c)$$

エネルギー輸送②：対流

$$\frac{dT}{dm} = -\frac{T}{P} \frac{Gm}{4\pi r^4} \nabla_{ad}$$

$$\rightarrow \ln T - \ln T_c = -\left(\frac{\pi}{6}\right)^{\frac{1}{3}} G \frac{\nabla_{ad,c} \rho_c^{\frac{4}{3}}}{P_c} m^{\frac{2}{3}}$$

表面条件

表面： $m = M$

このとき $P = T = 0$

ただし実際にはISMによって P, T は外側に向かってゆっくりと（有限値で）減少する。

星の「表面」を考えよう

表面条件

「光球(photosphere)」：
光学的深さ(optical depth) τ を

$$\tau \equiv \int_R^\infty \kappa \rho dr = \bar{\kappa} \int_R^\infty \rho dr$$

($\bar{\kappa}$: mean opacity)と定義したとき $\tau = 2/3$ となる面。

(c.f Eddington-Barbier関係式)

光球面での圧力：

光球面より外側にある質量の多くは光球面に十分に近くにあるとみなせるので

$$P_{r=R} = \int_R^\infty g \rho dr = g_0 \int_R^\infty \rho dr = \frac{GM}{R^2} \frac{2}{3} \frac{1}{\bar{\kappa}}$$

表面条件

光球面での温度「有効温度 T_{eff} 」：
その天体と同じエネルギー流束を発する黒体の温度

$$L = 4\pi R^2 \sigma T_{eff}^4$$

(c.f. Stefan-Boltzmann則)

κ を $\bar{\kappa}$ ではなく圧力・温度依存性を考慮してもう少し詳細に計算する。
Eddington近似：

$$f \equiv \frac{K}{J} = \frac{\int_{-1}^1 I \mu^2 d\mu}{\int_{-1}^1 I d\mu}$$

($\mu: \cos \theta$, I : 輻射強度)と定義した $f = 1/3$ とする近似。等方近似(?)

表面条件

Eddington近似+灰色大気(振動数依存性なし)

$$T^4(\tau) = \frac{3}{4} T_{eff}^4 \left(\tau + \frac{2}{3} \right)$$

⇒ $\kappa(P, T)$ を求められる。これを用いて

$$\frac{dP}{d\tau} = \frac{Gm}{r^2 \kappa} \approx \frac{GM}{R^2 \kappa}$$

を積分すると、精度の良い $P_{r=R}$ を計算できる。

単に $P, T \rightarrow 0$ とするよりは良い近似で計算できたが、拡散近似が有効でない表面近くでは複雑な輸送方程式が必要。

表面条件

表面と内部の条件を

「フィッティング質量」 $m_F (\leq M)$ の位置で合わせる
($M - m_F$ が小さいほど外側へのエネルギー輸送は小さい)

内部ではまず $M, X_i(M)$ が与えられているとする。すると $M, X_i(M)$ によって、前の方程式などを用いることで表面での2つの変数の組 (R, T_{eff} など) が解として得られる。

この解を m_F まで積分することで外部の解 $r = r_F^{ex}$ などが求まる。
内側からも同様に計算することで m_F での境界条件を計算できる。

$$r_F^{ex} = r_F^{in}, \quad p_F^{ex} = p_F^{in}, \quad T_F^{ex} = T_F^{in}, \quad l_F^{ex} = l_F^{in}$$

表面条件

外部と内部の解を合わせるシューティング法に替わる、数値計算で良く用いられる手法

1. 表面で適当な R, L のパラメータをたくさん用意する
2. 計算して $r_F^{ex}(R, L), P_F^{ex}(R, L), T_F^{ex}(R, L), l_F^{ex}(R, L) = L$ を求める。
3. 逆に解いて $R(r_F^{ex}, L)$ として P_F^{ex}, T_F^{ex} の式に代入

$$P_F^{ex}(R(r_F^{ex}, L), L) \equiv \pi(r_F^{ex}, L)$$

$$T_F^{ex}(R(r_F^{ex}, L), L) \equiv \theta(r_F^{ex}, L)$$
4. 境界条件を用いて $ex \rightarrow in$ と置き換え
5. 内部も同様に適当な P_c, T_c を用意し計算する。外部と重なるパラメータで求めたい変数の組が得られる。

$m = m_F$ での内部と外部の変数の区別をなくすことができる？

11.3 表面条件の影響と外層の解の特性

11.3.1 放射層

外層(envelope)を考えるのに“ m ”は不便。

→「普通の」星では半径の半分ほどに90%の質量がある

⇒“ P ”を用いる。(P は m の増加に伴って単調減少)

$$\frac{\partial T}{\partial P} = \frac{3}{64\pi\sigma G} \frac{\kappa l}{T^3 m}$$

この式から図11.2のように、
放射層における T と P の関係を導く

11.3 表面条件の影響と外層の解の特性

11.3.1 放射層

κ を近似する

$$\kappa = \kappa_0 P^a T^b$$

$$\kappa \approx \tau(\text{optical depth})/\rho R$$

$a > 0$: 等温なら高圧ほど吸収する→衝突頻度

$b < 0$: 等圧なら低温ほど吸収する→高温ほど放射する(?)

(c.f. Kramerの法則: $\kappa \propto PT^{-4.5}$ ($\propto \rho T^{-3.5}$))

この式を代入、 $l \approx L, m \approx M$ として積分を実行(envelope)

$$\int T^{3-b} dT = \frac{3\kappa_0}{64\pi\sigma G} \frac{L}{M} \int P^a dP$$

$$\mathbf{T}^{4-b} = \mathbf{B}(\mathbf{P}^{1+a} + \mathbf{C})$$

$$\mathbf{B} = \frac{4-b}{1+a} \frac{3\kappa_0}{64\pi\sigma G} \frac{L}{M}$$

11.3 表面条件の影響と外層の解の特性

11.3.1 放射層

Kramerの法則($a=1, b=-4.5$)を代入する。

$$T^{8.5} = B(P^2 + C)$$

$$\nabla \equiv \left(\frac{d \ln T}{d \ln P} \right) = \frac{4}{17} \frac{BP^2}{T^{8.5}}$$

$C(= P_0^{1+a} - T_0^{4-b}/B)$ の値によって ∇ が変化する。

放射層では $\nabla_{ad} = 0.4 > \nabla$ となる(Schwarzschild criterion)ので、これが上式が成り立つための条件となる。

(5.19)式で $\kappa_\nu \propto \rho T^{-\frac{1}{2}} \nu^{-3}$ を代入して
積分を実行する。
bf, ff吸収で使える

$$i) \quad C=0$$

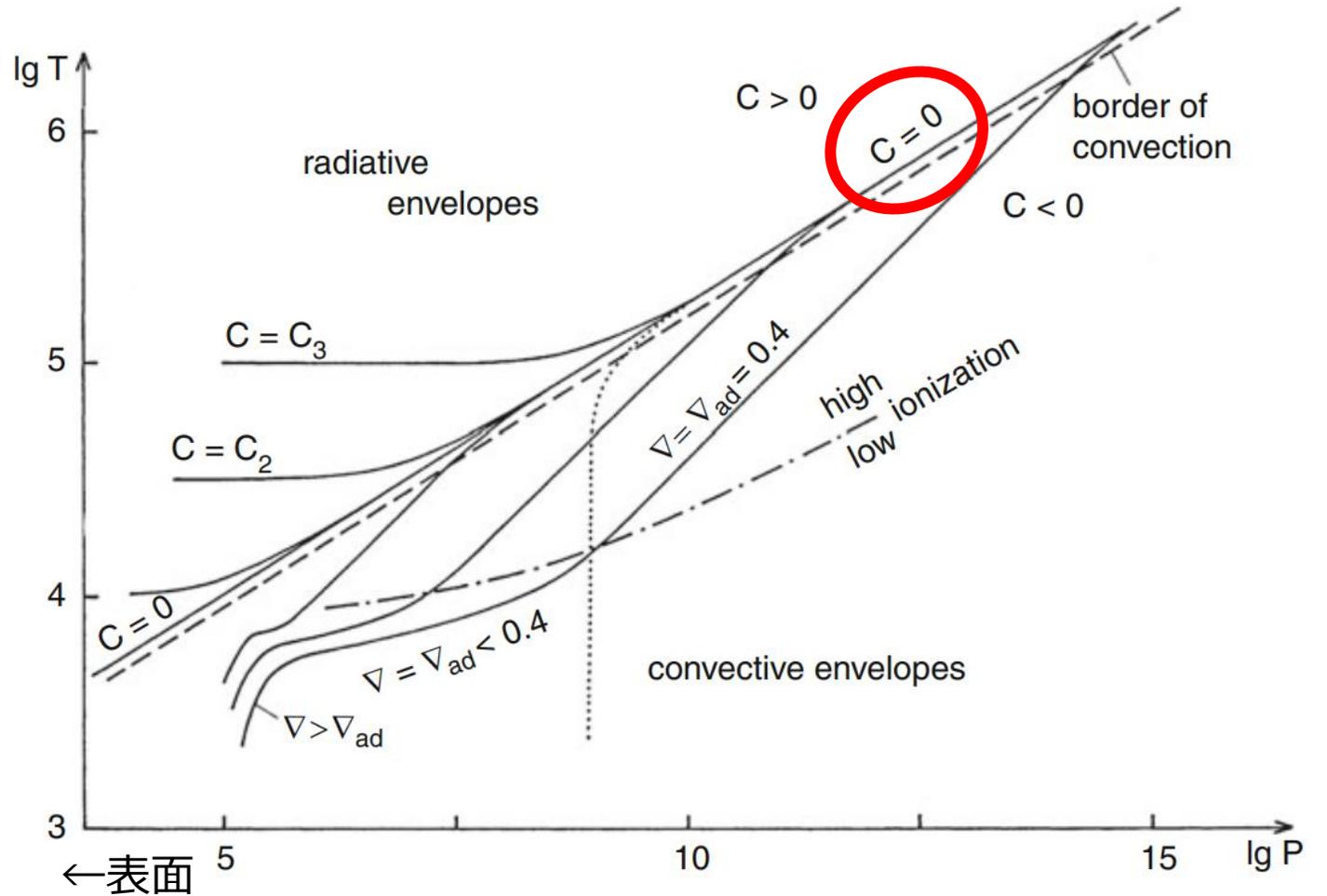
$$T^{8.5} = BP^2$$

$$\log T = \frac{4 \log P + 2 \log B}{17}$$

$$\nabla = \frac{4}{17} \approx 0.235 < \nabla_{ad}$$

⇒放射の条件を満たす

⇒ $P \rightarrow 0$ で $T \rightarrow 0$



ii) $C > 0$

$$T^{8.5} > BP^2$$

グラフの上側

$$\nabla < 0.235 < \nabla_{ad}$$

⇒放射の条件を満たす

$$T^{8.5} = B(P^2 + C)$$

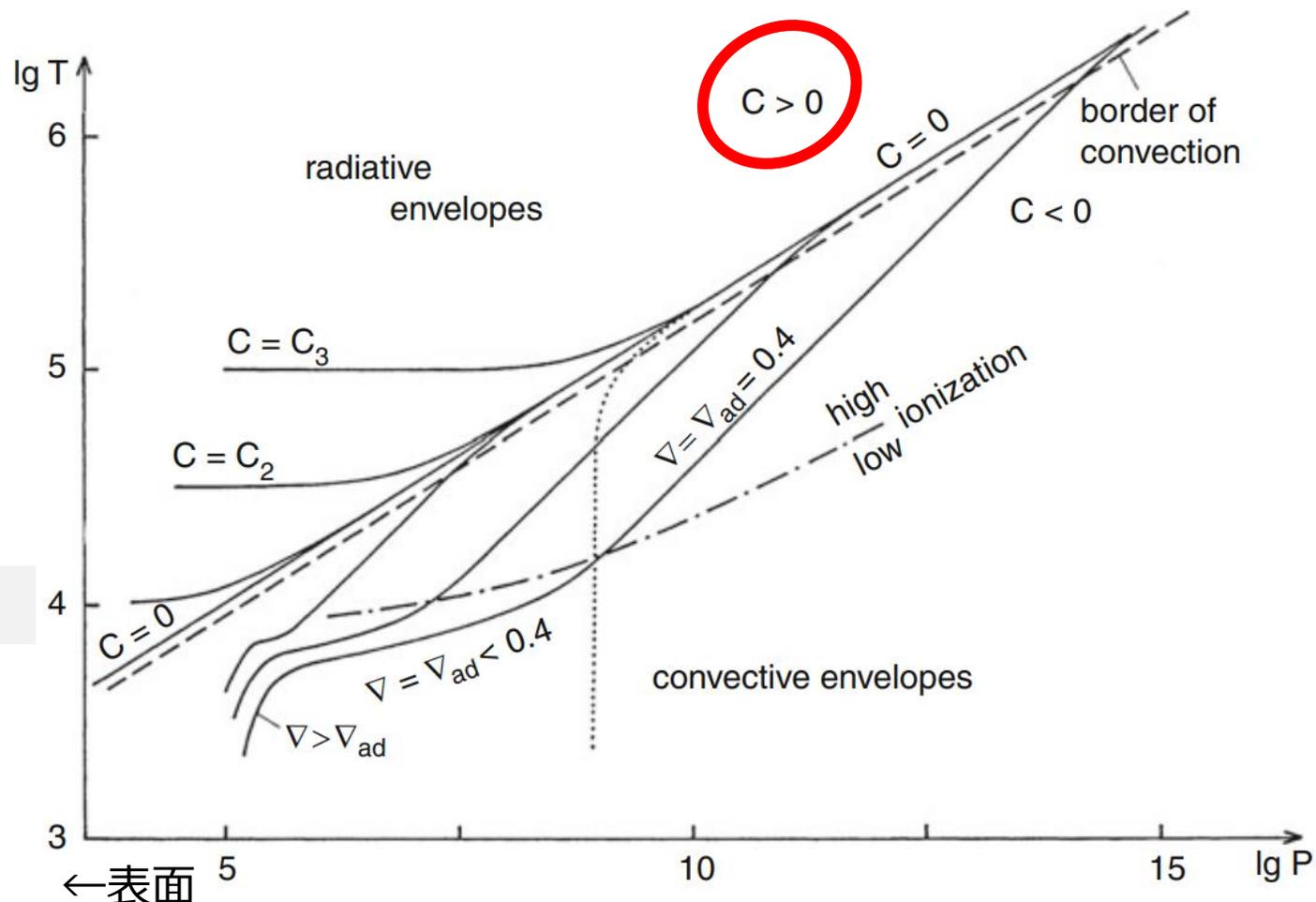
① $P^2 \ll C$

$T \approx \text{const.}$

表面に近づくと一定

光球面温度 T_{eff} が臨界温度 ($\approx 10^4 K$) 以上の場合、 $C=0$ の線を超えるので放射層が存在。

② $P^2 \gg C \Rightarrow C = 0$ に漸近。



iii) $C < 0$

$$T^{8.5} < BP^2$$

グラフの下側

$$\nabla > 0.235$$

⇒有限の P で $T \rightarrow 0$

対流で考える必要がある

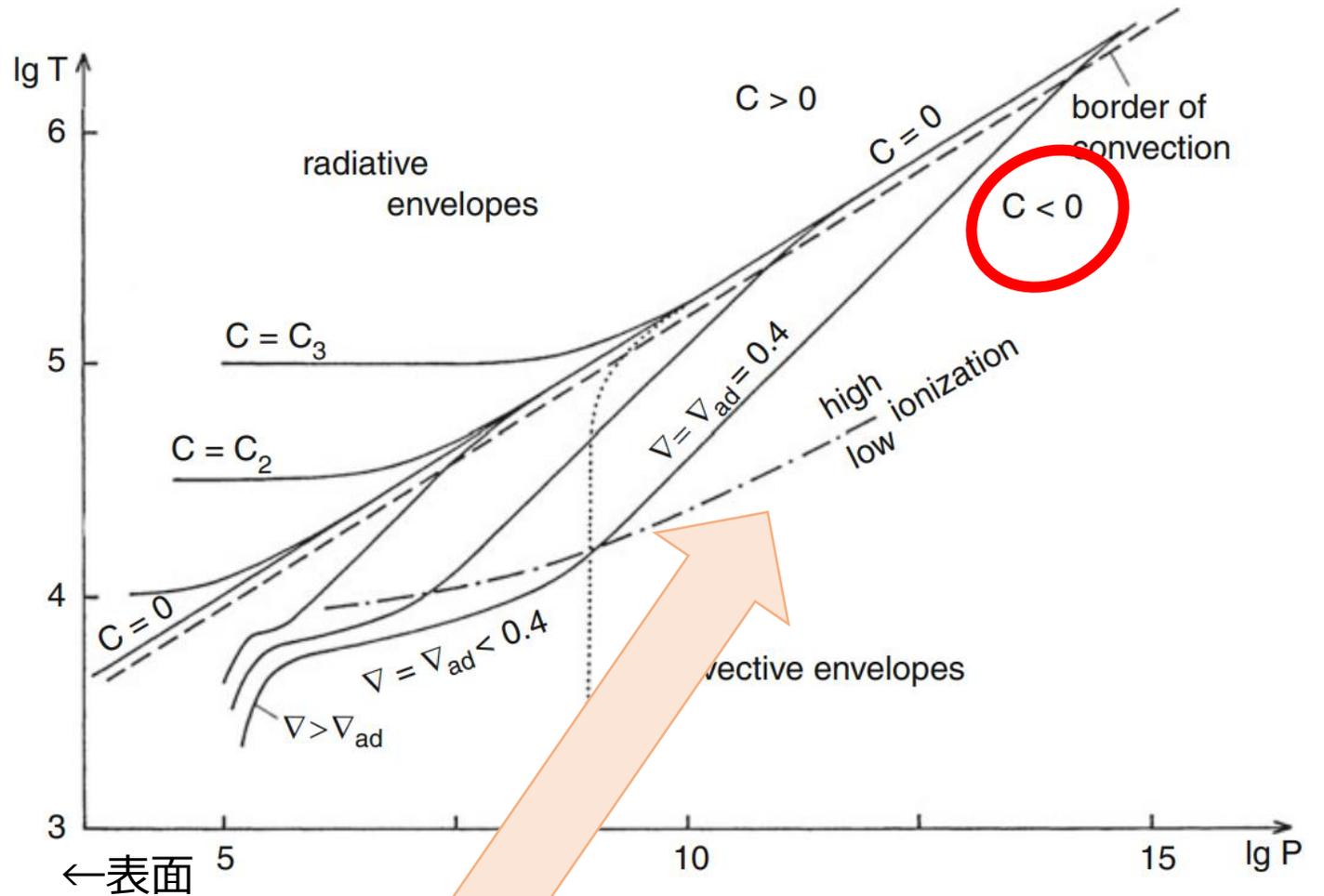
$\nabla = \nabla_{ad}$ の境界は

$$T^{8.5} = \frac{4 BP^2}{17 \nabla_{ad}}$$

∇_{ad} が定数なら直線だが、

∇_{ad} は急減

⇒境界は上向きに曲がる



表面付近でのionization効果によって

iv) $C < 0$: 対流の解

- 密度が高い \Rightarrow 対流強

$$\nabla = \nabla_{ad}$$

- HやHeがイオン化されなくなる温度まで下がると (Hの場合約 10^4 K \rightarrow) ∇_{ad} が小さくなり $\nabla = \nabla_{ad}$ の曲線が緩やかになる

(断熱温度勾配?)

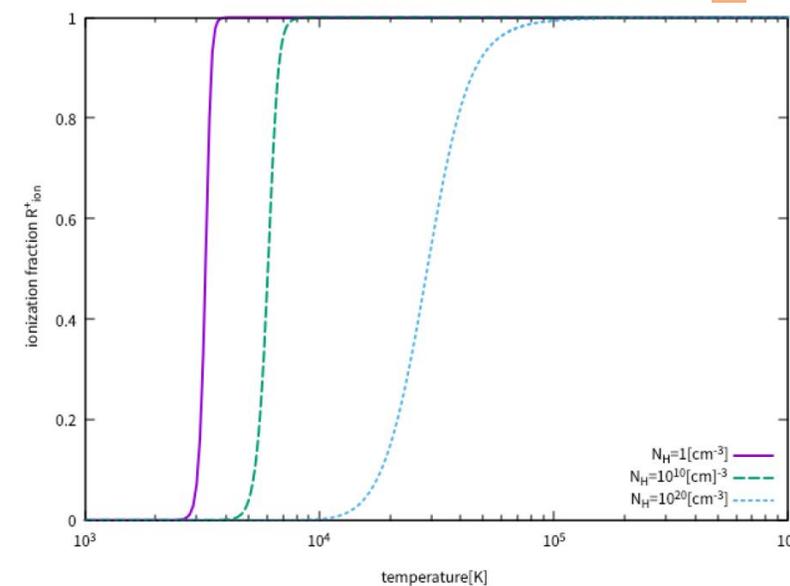
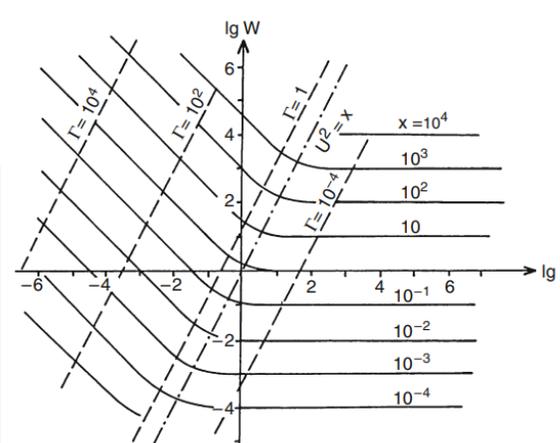
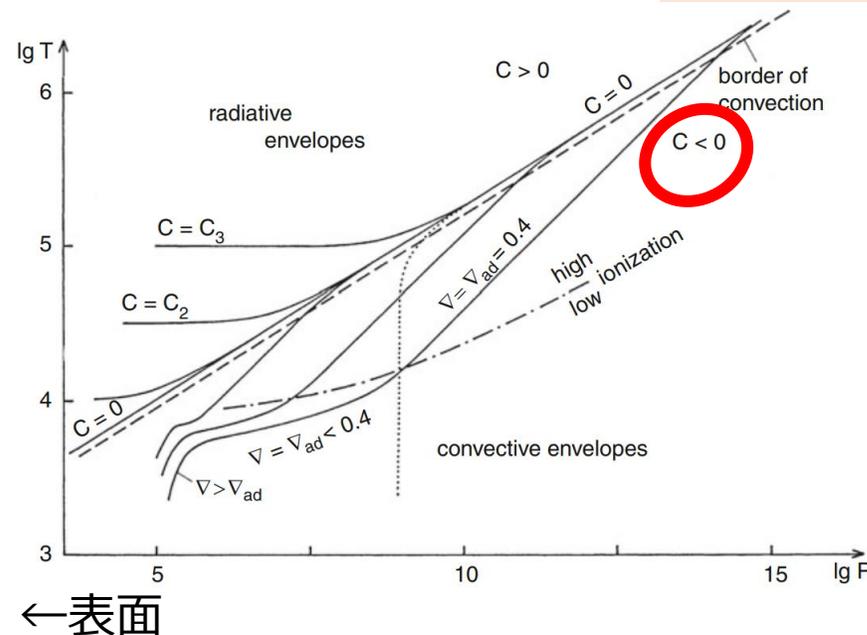


図3 それぞれの温度における水素原子の電離度。横軸は温度で縦軸が電離度である。

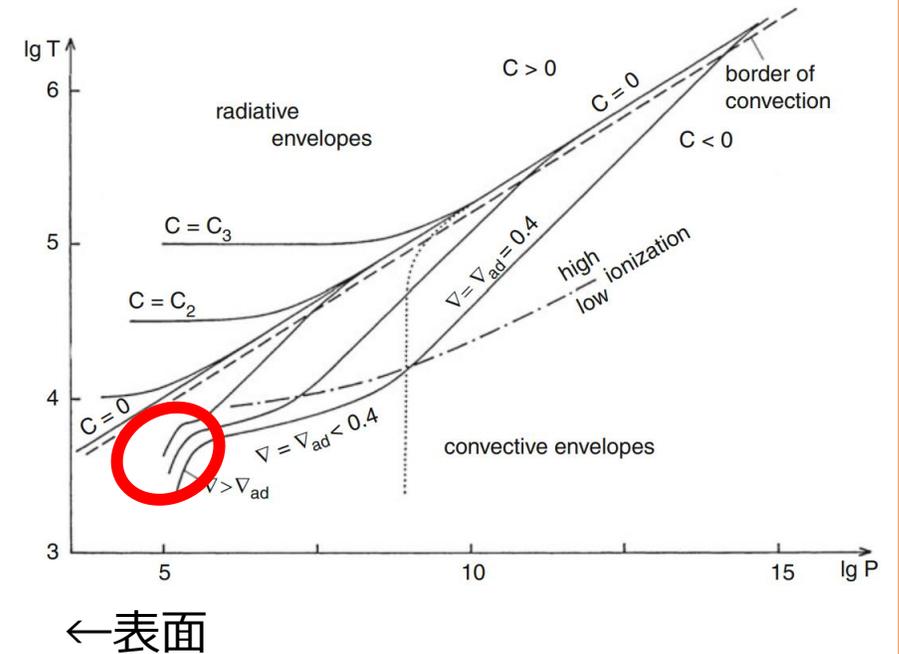
7.3節で $U (\approx \tau_{ff} / \tau_{adj})$ が小さいときは対流効率が良かった

iv) $C < 0$: 対流の解

- 表面に近づくと密度が小さくなり
 $\nabla > \nabla_{ad}$

となり、傾きが急になる。
 (不確かさが大きい)

光球面温度 T_{eff} が低いほど対流はより内部で起きる



まとめ

$$\kappa = \kappa_0 P^a T^b$$

粗い近似だが、他の場合（電子散乱）でも同様。

1. 放射層： $T_{eff} > 9000\text{K}$
 内部ほど $C=0$ に収束するので
 外側の境界条件は重要でない

2. 対流層： T_{eff} 小
全対流の星が T_{eff} 最小となる。
 光球面や over-adiabatic 層の位置で
 大きく影響を受ける

